

来月から、広報折込紙「室戸ジオパークだより」は、  
広報むろと裏面に掲載される予定です。

### ユネスコ世界ジオパーク再審査現地事前調査へのご協力ありがとうございました。

UNESCO再審査を来年に控えた、今年8月4日（木）～8月7日（日）の4日間、日本ジオパーク委員会によるジオパーク現地調査が実施されました。これまでは4年に1度の審査という形で行われていましたが、今回から室戸のように既にユネスコ世界ジオパークに認定されている日本ジオパーク地域については、「審査」ではなく「事前調査」が行われるようになりました。調査では、過去4年間の取組状況に関して、日頃から連携している地域の方々から、地質保全、教育、ツーリズム、防災、商品開発等々、多様なフィールドでの継続した取り組みについて紹介してもらいました。ご協力いただいた皆様には大変お世話になりました。

来年のUNESCO再審査に向けて、今の室戸ジオパークでの活動をより理解してもらえる方法を一緒に考える機会となりました。

#### 【調査中の様子】



佐喜浜町都呂津波避難シェルター



羽根のまち歩きガイド

今回の現地調査のリコメンデーション（今後の活動をより良くするための助言）は、9月始めに正式なものが発表されます。調査員からは、全体を通して「来年の再審査に向けた大きな課題は見当たらない。今の活動をどうステップアップさせ、効果的に魅せていくかがポイント。」というコメントをいただきました。特に室戸ジオパークの教育、防災、文化保全の面はとてもうまく展開されており世界に誇れる取組なので、それを他地域ジオパークに発信して行ってほしいと強く仰っていました。今後は、ジオパークの大切な理念の一つでもある「いい部分は他地域に共有し、他地域のいい部分を取り入れ、ジオパーク全体でよくなっていく」ために、室戸の魅力を世界中に発信していきます。



西山台地ガイド

2021年のユネスコ第41回総会において、毎年10月6日を「国際ジオ多様性の日(International Geodiversity Day)」とすることが決定されました(図1)。「ジオ多様性」とは聞き慣れない言葉ですが、地形や地質、川や湖も含めた地球のありかが土地ごとに多様であることを指す言葉です。

国際ジオ多様性の日制定の決議文には「人類の福祉と地球全体の持続可能な管理のためにはジオ多様性が重要である」とあります。なぜジオ多様性が重要なのでしょうか? 室戸の文化とジオ多様性が結びついている例を紹介します。

つよい雨風から家屋をまもるため、室戸の人々は身近な岩石を利用して石堀を築きました。吉良川のまちなみには「いしぐろ」と呼ばれる海岸のレキや西山台地のくさりレキを使った石堀があります(写真1)。かつての波打ち際にあったくさりレキは、室戸半島の西側の海成段丘上にひろく分布します。一方、佐喜浜では「鯨石」と呼ばれる赤や緑の石が石堀に多く使われています(写真2)。この石は大昔の海底火山から噴出した溶岩が冷え固まった岩石です。鯨石は佐喜浜川流域の地層に多く含まれ、佐喜浜では昔から石材として使われてきました。



図1. 国際ジオ多様性の日の公式ロゴ。  
Silas Samuel dos Santos Costa作。  
国際ジオ多様性の日の関連イベントのためなら誰でも下記のサイトからダウンロードして使用が可能です。  
<https://www.geodiversityday.org/organise-an-event> (出典)



写真1. 吉良川のまちなみのいしぐろ。いしぐろに使われているレキのうち、丸い断面の縁が茶色く変色しているものがくさりレキ。



写真2. 佐喜浜地区でみられる鯨石を使用した石堀。赤や緑の石が鯨石。

このように吉良川と佐喜浜の土地の違い(ジオ多様性)が、2種類の石堀(文化多様性)を産み出す条件となりました。多様な文化が成立した背景にはジオ多様性が存在することになります。つまり、これから文化多様性を保全していくためにはジオ多様性の理解が欠かせない、ということです。

国際ジオ多様性の日にあわせ、室戸世界ジオパークセンターでは9月下旬から10月末まで企画展「みんなちがってみんないいー四国と室戸のジオ多様性と私たちの生活-」(仮題)を開催します。企画展では室戸を含む四国のジオ多様性と文化や自然環境のつながりを紹介する予定です。興味のある方はぜひジオパークセンターにお越しください。